

救癩活動に尽くした看護師三上千代・女医服部けさと 宣教師コンウォール・リー女史との協働と離反

——湯之沢部落における活動に焦点を当てて——

The Cooperation and Estrangement Between Doctor Kesa Hattori,
Nurse Chiyo Mikami, and Missionary M.H. Cornwall Legh, Three
Individuals Who Devoted Themselves to Leprosy Relief Efforts

——Focus on Activities in Yunosawa Village——

加賀谷 紀 子

要約 1917（大正6）年、看護師三上千代は、宣教師コンウォール・リー女史の誘いで、湯之沢部落（群馬県草津）にハンセン病患者のための聖バルナバ医院を設立し医療・布教活動を行った。三上は女医服部けさを草津に招き、3人は深い絆のもとに協働し合い救癩活動を行った。やがて、信仰する宗派の違い、リー女史の2人に対する扱いの悪さ、患者に対する看護・生活面での対応の違いなどで、リー女史に対して不信感を持ち亀裂が生じた。三上らは聖バルナバ医院を離れ独自に医院を設立し救癩活動を行った。本研究は記録・関係資料を基に、3人による協働と離反の経緯を明らかにすることを目的とし文献検討を行った。

その結果、次の見解を得た。1) リー女史の優れた管理運営能力に尊敬の念を持ちながらも運営を自負する彼女の姿は三上らにとって精神的重圧であった。2) リー女史の節約精神は三上らにキリスト教信者としての奉仕の精神を強いていた。3) 治療、看護の実践面に重きを置く三上らと、精神的慰安に重きを置くリー女史との互いの主義・主張から生じる考え方の相違。4) 三上らは日本の“らい看護は日本人の手で”という強い決意を持っていた。5) キリスト教宗派の違いから生じる考え方の対立があった。しかし湯之沢での協働と離反は3人の共通使命である救癩活動をとおり、ライバル意識を燃やし互いの尊重と人間性を高めあったことは、後の日本のハンセン病看護に大きく貢献したと言える。

I はじめに

日本のハンセン病患者の看護に尽くした看護師に代表される三上千代があげられる。三上は後に、ハンセン病患者の看護の業績が認められ、ナイチンゲール賞を受賞する。中でも女医である服部けさ(1884~1924)とハンセン病患者への救済事業(以下、救癩活動という)に携わった外国人女性宣教師メアリ・ヘレナ・コンウォール・リー女史(Mary H. Cornwall Legh 1857~1941、以下リー女史とする)との絆は強く、草津(群馬県)の湯之沢部落*における聖バルナバ医院での3人の協働による活躍は大きかったが、その過程は過酷と壮絶な生涯でもあった。やがて信仰する宗派の違いやリー女史の三上と服部への差別的扱い、看護の資格のないリー女史の患者への対応の違い、何よりも重労働に加え待遇(給料)の悪さ、などから三上、服部とリー女史の間に亀裂が生じやがて袂を分かち合う

結果となった。湯之沢部落での三上、服部とリー女史に関する情報は住民からの聞き書きによるものとして僅かに記録に残されている。この記録から想起できる他の資料を基に、1917(大正6)年~1924(大正13)年7年間の3人の湯之沢部落における救癩活動を探ることで協働と離反について明確にできると考えた。

本研究は、三上千代、服部けさとリー女史の3人の救癩活動をとおり、お互いがどのように協働し、何故三上、服部がリー女史との離反に至ったかを明らかにすることを目的とし考察をした。

*湯之沢部落とは現群馬県草津町におけるハンセン病患者が集住している一つの行政区として位置付けられていた地区で、リー女史を中心に医院、施設が設けられ、救癩活動を展開。1916(大正5)年~1941(昭和16)年まで存在した。(写真1)

II 方法

文献・史料・資料等を用いた歴史研究である。主に中村茂著「草津喜びの谷物語」教文館、貫民之介著「コンウォール・リー女史の生涯と偉業」大空社、栗生楽泉園患者自治会編「風雪の紋—栗生楽泉園患者50年史」、藤本浩一著「鈴蘭村—ライに奉仕する三上千代女史の愛の伝記」、恩賜財団群馬県同胞援護会「群馬県社会事業沿革史(前編)」を中心に参考とした。リー女史関連の資料については聖バルナバ教会コンウォール・リー女史

記念館より、湯之沢部落関係資料については草津町図書館より、その他は国会図書館、国立ハンセン病資料館図書館(東京都東村山市)より史料、資料、文献を得た。

(倫理的配慮)当時の資料の中の病名(癩病、ライ病)については、一部資料原文のまま使用した。写真撮影、写真掲載については群馬県草津町聖バルナバ教会のコンウォール・リー女史記念館草津事務局より許可を得る。

III. 結 果

1. 三上千代（1891～1978年）の生い立ちと湯之沢部落での活動（写真2）

1891（明治24）年、山形新庄藩の士族の4女として生まれる。裁判所官吏の父の任地山形で育つ。明治43年、17歳の三上は伝道師として南伊豆伝道館に勤務をしたがそこで癩患者と接し看護の必要性を感じた。その後、三井慈善病院の看護婦養成所に入り、三上はここで医師である服部と出会う¹⁾。三上は服部から看護学の指導を受け看護師の資格を得て、東京の第一区府県立全生病院（現国立療養所多磨全生園）に勤務する。

三上はある患者から群馬県草津温泉に医師、看護師不在のらい部落の存在を知らされ、院長（光田健輔—ハンセン病医学に深く関わった人物）の許可を得て草津行きを決意する。草津に赴任し舎監となりリー女史を助けた。やがて服部と共に湯之沢部落でリー女史の運営するバルナバ医院での救癩活動を続ける。しかし、7年後意見等の対立を理由に1924（大正13）年独立し服部と共に近隣に鈴蘭病院を設立する。直後、服部の病死と経営難に遭い鈴蘭病院を手放す。鈴蘭病院解散後、一時全生病院に戻るが後に沖縄のハンセン病療養所愛楽園に着任し沖縄戦を体験した。この間、光田院長の指導で産婆試験に合格する。1957（昭和32）年にナイチンゲール賞受賞の他、黄綬褒章・勲4等瑞宝章受章し1978（昭和53）年に草津の服部の墓の隣に眠る（87歳¹⁾。（写真3、4）

2. 服部けさ（1884～1924年）の生い立ちと湯之沢部落での活動

1884（明治17）年、福島県の明治の武士の家系の娘として生まれた。生まれつき、病弱（心臓弁膜症）であり、赤痢に罹った時はキリストに祈り、手厚い治療・看護により一命をとりとめた。服部けさは両親に死別されたが、大正二年、医学校に合格、入学した。300人中19名の合格、6%の難関であった。当時の女医は一般に理解されておらず就職の門もきわめて狭く免許を得ても看護師の身分で、東京三井慈善病院に勤める。服部は日誌に「大正3年医師の免許をもったが、看護知識を得るためと実地修行の目的で、三井慈善病院に看護婦として働く。病室の清掃から蓄尿器を洗うなど雑務に追われながら3年過ぎた。この間身体も強くなり欠勤はなかった」と記している²⁾。

大正6（1919）年、東京の全生病院で看護師の資格を得た三上千代は病院長の許可を得て、赴任し舎監となりリー女史を助けた。リー女史の施設設立で収容者数が多くなり、医師不在もあって先に赴任していた三上の紹介で全生病院から招かれ実費診療を開始した。1918（大正7）年、リー女史による聖バルナバ医院を設立し、3人による布教を兼ねた救癩活動が行われた。服部は40歳で病死する³⁾。

服部には妹のテイがいた。テイは田山花袋に弟子入りをし水野仙子のペンネームで作家として活躍する。テイは、姉のけさを慕って草津を訪ねるが、結核を患って30歳で死亡。聖バルナバ教会で葬儀され遺骨は東京麻布の家に移された⁴⁾。

3. リー女史(1857~1941年)の生い立ちと日本での活躍(写真5)

リー女史は1857年5月、イギリスのカンタベリーに生まれ、1886年、スコットランドの聖アンドリウス大学でLLA(Lady Literate in Art)の称号を得た。十代の初め、ロンドンの叔父の借家に滞在し、より高度な勉学を授かった。伯父の一人は国会議員であり、従兄の一人は近衛連帯の士官だった関係からロンドンに滞在することが多く、良好な教育的環境の下で育った。かつて母と2人で世界旅行し日本に立ち寄った経緯から、1908(明治41)年51歳で日本聖公会の宣教師として来日した⁵⁾。

以後東京等で布教活動に従事したが、草津のキリスト教光塩会の要請を受け、59歳でハンセン病患者の多い草津湯之沢部落の地に聖バルナバ医院の他、聖ステパノ館(男子ホーム)、聖マリア館(女子ホーム)、聖ルセ館(夫婦ホーム)、準ホーム(以上以外の特殊患者収容)、望み小学校(義務教育を授く)、聖学幼稚園(小学校へ入学するまでの教護)、聖マーガレット館(患者の子供で未感染の女児)、テモテ館(患者の子供で未感染の男児)、その他外部へ保護を多く託するもの、教会等設立するなど救済事業に尽くした⁶⁾。

草津の温泉が病いに著効する事で多くの患者が集まり、リー女史は老齢ながら患者の訪問を続けた。次第にリー女史を慕い信仰を持つ者が多くなり彼女は草津の「おかあさま」と呼ばれるに至った。草津での患者の生活・医療・教育に力を注いだその業績が認められ昭和3(1928)年、藍綬褒章を、昭和14(1939)年勲六等瑞宝章を受ける。昭和16(1941)年、明石で84歳の生涯を終える。

〈リー女史の業績を称え記念碑に刻まれている碑文 草津町頌徳公園に建立〉

—マリー・ヘン・コンウォール・リー教母は西暦千八百五十七年五月啓示を得、~中略~世の最も不幸なる人々の母として、その仁愛神の如くその徳は區民稱ぶに母の愛稱を以てせるに徴すべし—⁷⁾

リー女史は、ロンドン時代に聖ペテロ教会の牧師G・H・ウイルキンソンに出会い強い影響を受けた。後日、リー女史は「私が今、ハンセン病者に奉仕するという喜ぶべき仕事をさせていただいているのは、少女のころウイルキンソン師から影響を受けたから」と述べている⁸⁾。

リー女史のホームにかけた費用は莫大なものであった。リー女史は母国イギリスに大きな財産をもちその不動産による収入や動産の利子をこれにあてていたが次第に動産を日本に運びこれらのすべてを湯の沢に費やしたと言われる。そのためにホーム内の重症の患者の介護、事務などは軽症の患者の手に委ね、諸経費の節約を図った。リー女史自らが「西洋乞食」と言われるほど質素な服装と粗末な食事に甘んじ、節約生活をしていた⁹⁾。

4. 三上千代、服部けさとリー女史との出会い、そして聖バルナバ医院

草津行きを決意した三上は「愛の家庭」の舎監として迎えられた。「愛の家庭」にはリー女史が男性患者から守るために8人の女性たちと一緒に暮らしていたが、自分は伝道の仕事に専念したいという理由からその任務を三上に委ねた¹⁰⁾。

三上は当時の患者の状況を見て診療所を作ることをリー女史に進言した。リー女史は

教会の隣の建物に「慰めの家」という診療所を建て、三上の意向で一緒に三井慈善病院で働いた服部けさを初代院長として招聘された。これが聖バルナバ医院の始まりであった（1916年・大正5年）。三上と服部の2人は三井慈善病院時代から熱心なクリスチャンであってプロテスタントの福音主義的信仰をもっていた。リー女史はカトリックに近い聖公会の信仰者であった¹¹⁾¹²⁾。

三上と服部の2人の性格についての記録がある。服部は無愛想で無口でめったに笑顔を見せず、一部の患者からは傲慢で冷たい人間だと受けとめられているが、実際は信仰心が厚く誠心誠意患者に尽くす慈愛に満ちた人であり、無口なのは強い福島訛りを気にしていたと言われる。一方、三上は明朗快活な性格であり、病弱な服部を労わり気弱になった服部を精神的側面からも支えていた¹³⁾。

5. 三上千代、服部けさとリー女史との協働と離反

1) 人員不足と重労働・低賃金の日々

もともと病弱であった服部は、バルナバ医院の他に草津町の依頼で町の警察医、小学校の校医も兼ね、変死体があれば駆けつけ検死を行い、小学校の定期身体検査や農村の往診に忙しくやがて体調を崩すことになる。そのため、三上の仕事が多くなり、足を切断する手術も服部に代わってしなければならず一人二役をする状況であった。町への往診時には、馬で移動するが馬に乗る力がなく、途中三上は服部に注射をしながら診察を行うことが幾度かあり仕事はハードであった。給料は服部は40円、三上は20円であったが医院の収益をすべて教会の収入として出していた¹⁴⁾。

服部は診療を休むことが多くなり、リー女史は休養宅に毎日訪ね「イツニナツタオキラレマスカ」と診療の催促をする。この頃から、リー女史はひそかに医師の後任者を求めていることが二人に伝わり、リー女史と三上らの間に隙間風があることを強く感じるようになる。リー女史によって迎えられた医師の給料は月200円の待遇であった。三上らは少ない給料を積み立てていた貯金を引き出し、バルナバ医院から100メートルほど離れた買ってあった家を「鈴蘭医院」*として開設した。2人は七年間住み慣れた聖バルナバ医院なぐさめ館ホームを去った。しかし三上と服部はこれからという矢先、服部が倒れ、僅か鈴蘭医院開院から3週間ほどで他界した。悲しみにくれた三上は全生病院の院長から、全生病院看護師を命ぜられ病院に戻った。しかし、湯之沢部落のことが気になり再び草津に向く¹⁵⁾。

*鈴蘭医院 現国立療養所栗生楽泉園官舎周辺に位置する。

2) 日本のらい患者の看護は日本人の手で
リー女史は、予防、消毒などの細かいことに心配りする三上らの言行が気に入らなかった。医学的知識を持たないリー女史は三上や服部とでは患者への対処の仕方も違い、トラブルもある一方、三上らに映るリー女史は、形式的な信仰、表面的な信者の言葉をそのまま受け取っている甘さ、慕いよるものを溺愛する、おべっかを使うものには惜しみなく金や物を与える、ことなどばからしく感じる。また、当時の英国人の日本人に対する態度が一等下の人間のように扱うことが多かった。リー女史は使用人を見るような態度で三上らに接していた。仕事上の共同者であるが、使

用人ではない。信仰の面でもリー女史の聖公会派と2人の福音協会派として、違いがあった。ますます服部の病気を重くすることになる。「いつまでも日本のライ患者が外国人の世話になっている時ではない」「新しい医者がかかるなら、私たちにもう用事がなくなるわ、はっきり袂をわかって出ていきましょう。私達二人で別の病院を作りましょう」と、日本人のライは日本人みずからの手で救うということで2人は湯之沢と上町（温泉街）の境にあたる土地付きの家を買収しそこに移った。自分たちの住居に「鈴蘭医院」の看板をあげ独立をした。しかし、その一か月後、服部は急に容態が悪化し40歳で急逝した¹⁶⁾。

3) キリスト教宗派の違いによる対立

ともにキリスト教の使徒としてライ患者に奉仕する点では共通している。三上と服部の2人はプロテスタントの福音主義的信仰をもち、リー女史はカトリックに近い聖公会の信仰者であった（前述）。信仰面でも、聖公会派（旧教・カソリック）のリー女史と福音協会（新教・プロテスタント）の二人の間に若干の違いが生じ、服部の病気ということも重なり独立へと繋がった¹⁷⁾。

服部と三上は三井慈善病院時代から熱心なクリスチャンであり、プロテスタントの福音主義的信仰をもっていた（三上はホーリネス協会の伝道師の資格を持っている）。リー女史はカトリックに近い信仰をもっていたため、考えが合わなかった¹⁸⁾。

4) 鈴蘭園のゆくえと湯之沢部落の解散

1925（大正14）年、再び鈴蘭園の再建のため草津に帰った三上は有料の療育施設・鈴蘭園を始めた。しかし、1931（昭和6）年、経営難により閉鎖した。その頃、国立の療養所設立（現国立療養所栗生楽泉園）の構想があり、三上は患者を国立療養所に移送することを決意した。後、三上は多磨全生園に戻りハンセン病看護に尽くした¹⁹⁾。

昭和11（1936）年、リー女史は高齢のため辞任しその後の事業は聖公会が引き継いだ。この頃日本は日中戦争突入、太平洋戦争に向かっていった時期であり、外国資金の導入が困難となり聖バルナバ医院も経営難に陥入り、昭和16（1941）年、医院は閉鎖され土地、建物一切をらい予防協会に寄付した。湯之沢部落解散と同時に、部落住民全員が栗生楽泉園内に移転を余儀なくされた¹⁹⁾。

IV. 考 察

リー女史を慕い、草津の地に赴任した三上からは強い絆で結ばれ、リー女史を懸命に助けたが、袂を分かつことになった。その要因を以下に明らかにし考察した。

1) バルナバ医院や施設運営費はリー女史の両親からの相続した私財と本国イギリスからの寄付金によって運営されたが、リー女史

の精力的な管理運営に尊敬の念を持ちながらも、運営を自負する彼女の姿に三上、服部にとって精神的重圧であったに違いない。そのために、衣食住の諸費はリー女史の負担するところが大きかったことから、3人は身を削る思いで業務に従事していたが、やがて病気がちの服部に対しリー女史は診療の催促をす

ることがしばしばあり、三上らに対するリー女史の配慮のなさを実感したに違いない。その後、リー女史の野望から生じた結果、資金不足による経営難となった。（患者の増加で、次々とホーム等の設立による資金不足—自己の資金不足）。それ故に、リー女史は2人に対し常にキリスト教者としての奉仕の精神を求めていたのではないだろうか。そして自らが西洋乞食と言われるほどに節約生活を徹底したと思われる。

2) 3人の生い立ちが人物的側面から見えることは、当時の西欧人主導のものの考え方や、リー女史から受ける使用人的扱いは、2人とも身分が高く信義を重んじる武士の家系を受け継いだ日本人女性としてのプライドが許さなかったとも推測できる。

更に当時の欧米人（英国人）の日本人に対する態度が一等下の人間のように扱われることが多く、リー女史も2人を使用人でもみるような態度が不満を募らせたと思われる。また、リー女史が2人に相談なく医院に医師を向かい入れ、新任医師への月給が200円、服部が40円、三上は20円という処遇面での問題が発覚しこれが2人のリー女史に離反する決定的なきっかけとなり、信頼を失い2人の大きな不満が生じたと言える。

3) 当時、キリスト教の宗派の違いから生じる意見の相違はやむを得ないことであった

としても、医療者でないリー女史は宣教師の立場から患者に対する精神的慰安に重きを置き、三上らはキリスト教信者であることと同時に医療者の立場から、治療・看護の実践面に重きを置いたことで多少のくい違いが生じたと思われる。

4) リー女史の人物像から、一宗教人としての奉仕活動を行うこと以外に格別な使命感を持ち救癩事業に関わっていたと想像できる。20に及ぶホーム設立や財政面では他人からの寄付・援助に頼らず私財を投じて運営費にあて、自分の力だという自負と強い精神力を持っていたに違いない。一方、服部や三上にとっては、単なる宗派の違い、運営方針に対する意見の相違のみならず、リー女史の勢力的かつ強引な行動に、日本人としてのプライドを傷つけられた思いがあったろう。それが、一層「救癩活動・看護は日本人の手で」の英断へと導いたこともあり、この精神こそが日本人としての誇りと勇気を持つことに繋がったのではないだろうか。

5) 3人の共通点は深い信仰心と救癩活動使命によって互いの尊重と人間性を高め合い、互いのライバル意識を強くし後の日本の救癩活動（医療・看護）に大きく貢献したことは言うまでもない。湯之沢部落の地に3人の墓が寄り添うように置かれている状況がすべてを物がたっていると想像できよう。

お わ り に

平成8（1996）年、およそ90年間続いたらい予防法は廃止され、平成13（2001）年の「らい予防法違憲国家賠償請求訴訟」では

国は控訴を断念しらい対策の誤りを認め謝罪した経緯がある。当時、ハンセン病問題が表面化されたことでハンセン病医療について

人々の関心が高まった。らい予防法廃止から20年近く経過した中で、元患者の減少もあって忘れ去られようとしている。このことを風化させないためには、ハンセン病医療の歴史に触れることで、看護を含めた医療とは何か、人権とは何かを思い起こし、過去を振り返る事は大きな意義があると考え。これらの一環として本研究は、ハンセン病看護の基礎を築いた三上千代、服部けさと、リー女史との協働と離反についてまとめた。残念なことに三上ら3人はすでに他界しており、詳細な内容

収集には至らず歴史を研究をするうえでの限界と自身の課題として受け止めることとした。

本研究にあたり、草津町図書館の関係者、草津町の聖バルナバ教会の方、東京都東村山市のハンセン病資料館の図書館の担当の方から、多くの関係史料・文献等の提供、写真提供と撮影の許可を頂いたことに感謝をしたい。さらに、東北・関信地区看護歴史研究会の皆様本研究に対する温かい御意見、ご支援を頂いたことも併せて感謝申し上げます。

引用文献

1. 栗生楽泉園入園者自治会・国立療養所栗生楽泉園編：熊笹の尾根、皓星社、20、2002
2. 最上二郎：ハンセン病と女医服部けさ、歴史春秋社、116-117、2004
3. 最上二郎：ハンセン病と女医服部けさ、歴史春秋社、117-118、2004
4. 武田房子：水野仙子－理智の母親なる私の心、ドメス出版、184-212、1993
5. 貫民之介：コンウォール・リー女史の生涯と偉業、大空社、39-44、1954
6. 恩賜財団群馬県同法援護会民生問題研究所：群馬県社会事業沿革史前編、69-82、1950
7. 恩賜財団群馬県同法援護会民生問題研究所：群馬県社会事業沿革史前編、77-78、1950
8. 中村茂監修：写真集、コンウォールリー女史物語－その生いたちとハンセン病患者への奉仕の生涯－コンウォールリー女史顕影会編、101-11、2007
9. 栗生楽泉園患者自治会編：風雪の紋、栗生楽泉園患者50年史、49-50、2001
10. 藤本浩一：鈴蘭村－ライに奉仕する三上千代女史の愛の伝記、博進堂、55-61、1968
11. 中村茂監修：写真集・コンウォール・リー女史物語－その生いたちとハンセン病患者への奉仕の生涯－コンウォール・リー女史顕影会編、33-34、2007
12. 栗生楽泉園患者自治会編：風雪の紋、栗生楽泉園患者50年史、55-56、2001
13. 野中武社：谷間の母様－ハンセン病の救世主・リー女史伝、新風舎、160-163、2006
14. 藤本浩一：鈴蘭村－ライに奉仕する三上千代女史の愛の伝記、博進堂、48-61、1963
15. 藤本浩一：鈴蘭村－ライに奉仕する三上千代女史の愛の伝記、博進堂、45、1968
16. 藤本浩一：鈴蘭村－ライに奉仕する三上千代女史の愛の伝記、博進堂、48-61、1968
17. 藤本浩一：鈴蘭村－ライに奉仕する三上千代女史の愛の伝記、博進堂、55-63、1968
18. 徳満唯吉、貫民之介：湯之沢聖バルナバ教会史、日本聖公会・聖慰主教会、31-34、1972

19. 武田昭子編集：「モノ」が語りかけるハンセン病問題、昭和女子大学光葉博物館、42-43、2003



写真1 湯之沢部落 草津(昭和6年)



写真4 リー女史の墓



写真2 草津鈴蘭村にて 三上千代
聖バルナバ教会保管資料より



写真5 リー女史
聖バルナバ教会資料より抜粋

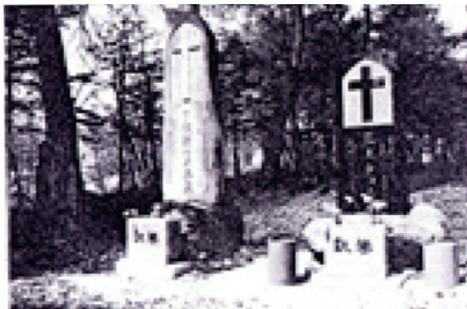


写真3 服部けさ・三上千代の墓
(湯之沢部落 草津)